

教育達成過程における階層差生成のダイナミクス - 選抜制度と不平等に関する計量・シミュレーションアプローチ -

著者	濱本 真一
号	16
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教博第174号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00097226

はま もと しん いち

濱 本 真 一

学 位 の 種 類 博士（教育学）

学 記 番 号 教博 第 174 号

学位授与年月日 平成 28 年 3 月 25 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当

研 究 科 ・ 専 攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）
総合教育科学専攻

学 位 論 文 題 目 教育達成過程における階層差生成のダイナミクス
ー選抜制度と不平等に関する計量・シミュレーションアプローチー

論 文 審 査 委 員 （主査）

教 授 秋 永 雄 一

准教授 島 一 則

准教授 青 木 栄 一

准教授 三 輪 哲

（東京大学）

〈論文内容の要旨〉

本論文は、個人の教育達成過程に潜む親の地位の影響力について検討することを目的とする。個人が教育を受ける機会は戦後から拡大を続け、多くの人が同等の学歴を得られるようになる、同じ学歴の中にも優位なものとそうでないものといった質的な分化（学校間格差）が生じてくる。本論では、中学校も含めた質的な分化に関する階層間格差、およびそれらが生じるメカニズムに着目し、（1）中学校段階より始まる教育達成過程のどこで階層による分化が生じるのか、（2）教育達成過程の階層差構造は、世代間でどう変化してきたのか、（3）制度条件である教育機会の規模によって階層差が変化するのか、の 3 点を検討する。

6 章からなる本論は理論篇（1・2 章）、計量分析篇（3・4 章）、シミュレーション篇（5・6 章）の 3 部で構成される。理論篇では、1 章でこれまでの社会学・教育社会学が教育機会

の不平等をどのように扱ってきたのかをレビューし、地位達成過程の中で見過ごされてきた学校制度内における移動過程に着目することの重要性を論じる。2章では、教育機会不平等が生じるメカニズムを個人の合理的選択から説明する「相対リスク回避説」に立脚し、本論が強調する質的差異を含む教育内移動を表現できるよう、モデルを拡張した。

計量分析篇では、従来の教育社会学のアプローチと同様に、社会調査データを用いた計量分析によって、戦後日本の教育機会不平等がどのように変化してきたのかを述べる。3章では、高校と高等教育段階の「進学／非進学」の分断線に着目し、出身階層による進学機会の不平等を検討した。男性では、出身階層の影響は高校進学時に比べれば高等教育進学時には小さくなるという「階層効果逓減」の構造は、戦後変わらず安定的に推移していた。それに対し女性では、高等教育の主役が短大から4年制大学へシフトしていった1960年代出生コーホートから、高校段階の進学格差が縮小し、「階層効果逓減」構造は崩壊したことを明らかにした。

4章では、質的差異に着目した計量分析を行った。その結果、男性では階層効果逓減パターンにほぼ沿うような結果が得られ、その構造は強固に安定的な推移を示した。一方女性では、質的差異を考慮してもダイナミックな変化を示した。高校段階の格差は、4年制大学の進学率が上昇した時期に一旦不平等化の傾向を示した。また、男女ともに中学校段階の分化に対する階層差は、無視できないレベルで存在するものの高校段階での移行の階層差と比べると小さい。その一方で、進学した中学校のタイプによってそれ以後の教育達成は強力に水路づけられており、教育達成の階層による分化機能の一翼を担っていることは疑いない。計量分析篇の結果を総合すると、教育機会の質的分化は、4年制大学／短大・専修学校といった分断的な分化から、偏差値等で順位づけられる境界のあいまいな傾斜的分化に移行し、その上位部分に進学するための、前段階の学校における分化が不平等を増大させる効果を持っていると考えられる。

シミュレーション篇は5・6章で構成され、2章で示した数理モデルの精緻化とモデルから導かれる未来予測を試みた。2章で示した相対リスク回避モデルの主要なパラメータは解析的な算出が不可能であるため、5章では数理モデルで表現されるバーチャルな人工社会をコンピュータ上に現出させ、人工社会の住人の教育達成と、現実社会から得られた実測データとを見比べることによって、主要なパラメータを推定した。その結果、相対リスク回避説は、特に高校段階に関しては限定的な機能しか持たず、高校進学格差は家庭の経済的な格差が大きな意味を持つことを示した。

6章では、5章で完成させたモデルを用いて、中学校段階の分化が進行した際に起こる階層間格差の未来予測を行った。得られた結果は、国私立中学校のシェア増加に伴い、その進学に対しては単調に不平等化し、さらに国私立中学校に進学した場合の、高校進学に対するアドバンテージが上位校から中位校まで及ぶこと、国私立中学校の増加によって、その選抜から漏れた、もしくは参入できない者が、より下位の高校に追いやられる袋小路の進学パターンが描きだされたこと、この2点である。

本論で得られた知見をまとめると、質的差異を含む複数の教育段階は、段階ごとにその順位をシャッフルする「御破算」の機能を多少持ちながらも、不平等の迂回経路として階層に

よる純化を一層進めていくように機能する。中学校段階の質的分化の進行によって、高校・大学進学に関する格差が解消したように見えるが、実際には中学校段階で生じた不平等がより上の段階まで継承される。

これらの結果に基づき、終章では「教育を受ける機会」の意味を再考する必要性を主張した。それは、単に進学する機会だけではなく、どのような教育内移動を経由して教育を終えるのかの選択可能性としてもとらえることの必要性である。教育を地位達成過程の一経由点ではなく、時間的にも内容的にも幅を持った「過程」としてとらえることによって、大衆化した教育の中に潜む不平等構造を見出すことが可能となる。

＜論文審査の結果の要旨＞

本論文が解明すべき問題として取り上げている研究課題は「教育達成の階層間格差」の問題である。これは（教育）社会学、とくに社会階層論の中心的な研究テーマの一つであり、数多くの先行研究が存在する。そうした中で本論文の特長として特筆すべきは、教育達成の階層間格差が生成する「メカニズム」の解明に主眼を置いている点である。

メカニズムの解明に力点を置くということは、筆者の関心が予測能力を持つ理論の構築を目指していることを意味する。自然科学の分野では、予測能力を有していることは理論の正しさを示す必要条件であり、それは実験や観測によって検証される。理論を解析的な数式で表現できない場合は、数値計算（シミュレーションもそのうちの一つ）によって、その予測の正しさを検証する手法も確立している。社会現象を対象とする社会科学の分野では、条件を統制した実験によって理論の正しさを検証するという手法の適用範囲が限られているため、過去のデータから帰納的に一定の法則性・規則性を見だし、その結果を外挿して予測するという手法に従うものが多い。

本論文は、これを一歩進め、一定の理論を発展させた数理モデルに基づくシミュレーションを行い、その一方で既存の調査データの計量分析から得られた結果と照合して数理モデルに含まれる主要なパラメータを推計する。具体的にいえば、まず、合理的選択理論に依拠したグリーンとゴールドソープ（1997）の「相対リスク回避説」（人間は、自分の親と同等かそれ以上の地位達成を望み、出身階級よりも下の階級に到達する確率（相対リスク）を最も低くするような教育達成を志向して行動する）にベースに、それを発展させた教育機会の不平等が生じるメカニズムに関する数理モデルを構築する。次に、シミュレーションの結果を既存の調査データの計量分析から得られた結果と照合して、数理モデル中の主要なパラメータを推計し、現実にフィットする数理モデルを完成させる。こうして完成させた数理モデルによって未来予測を行う、という手順を踏んで分析を進めている。その結果、上記の「論文内容の要旨」にも記されているように、中学校段階での進路の分化が進行した場合、国私立中学校進学者のシェアの増加に伴い、そこへの進学の階層間格差は単調に拡大して、その影響は高校進学にも広く及び、国私立中学校に進学しなかった者は、より下位の高校に追いや

られるという袋小路の進学パターンが出現するという予測結果を得た。

教育の世界では頻繁に制度改革がおこなわれている。比較的最近の例を挙げれば、公立の中高一貫校を学校教育法第1条に「中等教育学校」として位置づける改正があったとき、公立中高一貫校の設置は高校入試によって分断されている中等教育の一貫性を生み出すという賛成論と、進学校化して受験競争を早期化させる弊害があるという反対論が激しくぶつかりあった。しかしこの問題をめぐる賛否の議論で決定的に欠けていたのは、公立中高一貫校が設置されたとき、どのような条件の下ではいかなる事態が生じ得るか、ということに関する説得的な根拠が示されなかったことである。それを欠く議論は単なる水掛け論に終始してしまう。

本論文の筆者は、早い時期からフランスの社会学者レイモン・ブードンの有名なシミュレーション（「高等教育の機会を拡げることによって社会的不平等は縮小していく」という通念が、ある一定の条件下では裏切られることを示したもの）から大きな影響を受け、将来予測の問題に一貫して強い関心を寄せてきた。将来起こり得る事態を数理モデルに依拠したシミュレーションによって予測するという手法は、社会科学においてはまだ開発途上にある未完成の手法である。しかし、現在もっとも精力的にその手法の確立に向けて研究が進められている分野でもある。「教育達成の階層間格差」というオーソドックスなテーマに対して、斬新な手法を積極的に適用する本論文の試みは高い評価に値する。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。